



車いすに乗せられた体調不良者へ声をかける医師

東日本大震災 福島原発事故 住民一時帰宅を救護班がサポート



福島 2011.5.22

福島第一原子力発電所の爆発事故による周辺住民の避難が長期化する中、原発から半径20キロメートルの警戒区域の住民の一時帰宅が行われています。この一時帰宅に際し、福島県支部では5月22日から救護班を派遣し、住民の体調不良などに備えた救護活動を展開中です。

この救護活動は、政府の原子力災害現地対策本部からの要請に基づくものです。一時帰宅を終えた住民へのスクリーニング（汚染の検査）を行う会場は、汚染防止のためにビニールシートで養生。住民は防護服を着用したままで検査を受けるといったものものしい雰囲気の中での救護活動となっています。救護班員の一人は、「福島県で起こった原発事故。地元の日赤病院として、少しでも住民の皆さんのお役に立てればと思います」と決意を語っています。

6月9日は、双葉町と大熊町の町民253人の一時帰宅が行われ、救護班は中継基地（会場）となる田村市古道体育館で傷病者の発生に備えました。この日は体調不良や指をけがした人など3人の手当てを行いました。いずれの方も軽症。日赤では、この災害に対し赤十字として何が出来るかを考え、今後も住民支援を継続していきます。

出典：赤十字新聞2011年7月号 P.6